

現代における日本のキリスト教と LGBT

——牧師と信者との対話から——

大和田香葉

1. 現代の LGBT とキリスト教における重要文献

1.1 研究の背景

現代におけるキリスト教教会において LGBT の人々への対応や考え方は、現時点ではっきりとは定まっていない。日本における性別越境の社会・文化史研究家の三橋順子によると LGBT という言葉が日本に普及し始めたのは 2010 年頃だという (三橋 2015)。まず、LGBT という言葉が普及し始めたのも最近の事なのである。

LGBT の学生への対応について制度が整いつつある大学もある。企業でも LGBT の人への対応を考えているところもある。さらにアメリカやカナダの海外のキリスト教教会では LGBT の信者もオープンに受け入れているところがあり、教職者となる者もいる。

しかし、日本のキリスト教教会は信者が日本全体で約 1% と言われている。非常に少ないこともあり、LGBT の人々への対応や考え方が未だに明確になっていない。

ここで、私が大学に入ったばかりのクリスマスの時のエピソードを紹介したい。私が生まれてすぐに通っていた教会のメンバーの家でクリスマスパーティーをした際、LGBT の子が一人いた。その子は体は女性だが、心は男性である。LGBT の L にあたる。ここではその子を A さんとする。家に招待してくれた友人の母は熱心なキリスト信者で、LGBT という存在に関して否定的な立場であった。飲み物を配る際にその友人の母はわかりやすくするために男性は青のコップ、女性はピンクのコップと色を分けた。A さんは迷わず青のコップをとったがすかさず友人の母は「あなたは女の子だからピンクを使いなさい」と言った。その言葉に傷ついた A さんは泣きながら家へ帰ってしまい、この出来事があった日以来ほとんど教会に来なくなってしまっ

た。

友人の母は A さんが LGBT である事は知っていたらしい。この問題は、教会が LGBT の人について予想も対応もしていなかったが故に起こったことであるとも言える。私はこの出来事がきっかけで LGBT という存在を知り、気づけば周りにそのような友人も増えていた為、徐々に興味をもつようになった。

「教会」と言っても宗派や教会、牧師によっても意見は様々である。日本のキリスト教会はこの問題に関してほとんど理解、準備、合意をも持ち合わせていないのが実情である。現在私の通っている教会に LGBT とははっきりわかる人はいないが、LGBT が広く知られてきている現代で、伝道をしていこうと考える日本のキリスト教において無視できない課題だと考える。そこで、自分の教会を含め、街にある教会がそれぞれどのような考えを持っているのかを明らかにした上で、今後の課題を考える。

この卒業論文は、自分もキリスト教信者であるクリスチアンのコミュニティの一員という立場から研究し、書いていく。

1.2 先行研究

まず、LGBT という視点では教育現場や、宗教、海外における先行研究は数多くあるが、「LGBT についてキリスト教者の意見をまとめたもの」に関する文献はない。その中でも LGBT と教育に関するテーマでは榎本てる子・岡嶋 宙士・工藤万里江の「キリスト教主義大学における LGBT 学生に対する人権保障の取り組みに関する調査」で7つのキリスト教主義大学にインタビューし、大学によっては積極的にジェンダーやセクシャリティについて取り組んでいる部署があると述べている。しかし、インタビューに応じた各大学の担当者は、キャンパス内における LGBT 当事者の人権保障に対して積極的に取り組もうとする姿勢を見せていたが LGBT について大学全体では認識が低く具体的な取り組みを継続していくためには大学内の受け入れる環境が整っていなければならないとしているということが明らかになっている(榎本・岡嶋・工藤 2017)。

また、研究委員会企画シンポジウム3「今、教育現場で LGBT の子どもたちは」では、学校教育現場において性別二元性から来る問題と、実際に子と

どもたちが抱える問題を知り、何が問題で、どのような取り組みが可能か3つを提示しそれを聞いてどのように感じたかが述べられていた。松並知子らは LGBT に限らず性の多様な人々の声をすくい上げる事の重要性を再認識したと述べている(加藤・堀江・東・湯川・松並 2018)。

2つの先行研究では、LGBT を含め性の多様性について日本の教育現場でも考えていかなければならないという意見が見られるものの、知識や認識が低いことや環境が整っていないことが明らかだ。キリスト教が関連しているものの、教育という立場を基準にしてその対策や現状が述べられている。

また、キリスト教と同棲愛について「レズビアン視点からキリスト教を読む——異性愛主義との〈闘争〉と〈連帯〉の可能性——」では、著者である堀江有里自身がレズビアンというポジションからキリスト教をとらえなおす作業の可能性、「紛争」と「連帯」について述べている。ここでは、レズビアンとして今後の課題と問題が明らかされた(堀江 2011)。

堀江は「キリスト教における当事者運動の可能性——同性愛(者)嫌悪への対抗言説の構築に向けて——」においても当事者目線で「キリスト教は同性愛を受け入れられるか」という問題に対して今まで参加した活動経験をもとに意見を述べ課題をあげている。この二つは LGBT の立場の主張が書かれたものであった(堀江 2009)。

アウティエロの「時代の変化における同性愛とキリスト教倫理」によると、同性愛に対する伝統的な見方を述べている。アウティエロによると、カトリック司教団の動向として「教会は原則として『同性愛的な指向』と『同性愛的な行為』を区別している。自然の秩序に反するという理由から同性愛的な行為は認められていないのに対して、だれかが同性愛的傾向/指向を持っている場合、それ自体は個々の人間のひとつのかたちとして見られるべきであり、非難されるべきではない」と明らかにしている(アウティエロ 2019:153)。

さらに趙慶喜は「韓国における女性嫌悪と情動の政治 Misogyny and the Politics of Affect in South Korea」の中で、韓国のある番組で LGBT について教室コント形式で展開される放送があった際プロテスタント保守陣営は真っ向から LGBT を否定したと述べており、韓国では反同性愛であることが明らかである(趙 2018)。

また、森本あんりの「同性愛とキリスト教」の冒頭では、アメリカの教会、学校、軍隊、市民権法でもアメリカ社会全体がこの問題について模索しており、この現象は伝統的に一般民衆の性論理が緩やかな日本、中国の状況と異なっていることが分かる。同性愛についての真剣な議論はアメリカ特有であって、さらにはその背景にはキリスト教があると述べられており、アメリカに比べ言うまでもなくそもそも日本のキリスト教界はこの問題に関してほとんど何の理解も準備も持ち合わせていないのが現状であると述べている(森本 1997)。

しかし、最近書かれた櫻井園郎の「聖書における性別の神学的意味と実践的意義」では、現代「社会における性別の問題」の部分で、日本社会の同性愛の状況として法律上なんの規定も置かれていないが、渋谷区、世田谷区では「同性パートナーシップ条例」に基づいて「パートナーシップ証明書」が発行されること、千葉市でも同様の制度が取り入れられつつあることから、日本でも LGBT 者に対する対処がとられつつあることや LGBT の考えが広がりつつあることが分かる。また、はじめの「問題の所在の部分」では「近年、日本社会においても、「LGBT」論が、あたかも当然の論理であるかのように主張され、政治、行政、法律の世界においても、一般社会においても、共通認識・常識化されつつあり、従来、通常と考えられてきた性的関係を主張することが咎められ、憚られる状況となってきている」と述べられており(櫻井 2019: 139)、今日では LGBT について考えられていること、言葉自体が一般化されつつあることが明らかだ。やはり 2010 年ごろから 2019 年にかけて日本で LGBT について考えられるようになったことがわかる。

これら 3 つの論文から海外の LGBT のあり方、さらにクリスチャンの中での LGBT 者への状況が分かると共に、日本では LGBT という言葉が一般化されつつある一方で、キリスト教の中での LGBT の定めが他国に比べてはっきりしていないことも明らかだ。そこで、次に現段階で日本のキリスト教の LGBT についての意見に注目した。

先に言及した堀江有里は「レズビアン視点からキリスト教を読む——異性愛主義との〈闘争〉と〈連帯〉の可能性——」において、日本でも同様に、プロテスタント諸派をみた場合、多くの教派では牧師の資格を同性愛者に認めないという規則は存在しないためアメリカ合州国のような激しい論争は起

こっていないが、日本では以前牧師検定試験の受験の際に自らゲイだと表明した男性に対して「簡単に認めるべきでない」との発言があり「差別事件」として扱われた。このような「差別事件」として問題化されてきた問題はいくつつかあるようだ(堀江 2011)。

『性同一性障害 Q アンド A』という本の第 2 部「クリスチャンとして考える」では、クリスチャンが心に留めるべきこととして、聖書にある「神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして彼を創造し、男と女とに彼らを創造された」(創世記 1 章 27 節)、「それゆえ男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである」(創世記 2 章 24 節)が挙げられ、性を決めるのは、全能の創造主、神 1 人だと主張されている。つまり、男であるか女であるかは LGBT のように自分で選択するものではないと述べている(前島 2008 : 38)。

また『船の右側』という雑誌では、新城教会主任牧師滝本順が「同性愛と神の裁き」という題で同性愛はキリスト教の中では罪であると明記し、聖書の言葉を基準にしなくてはならないと主張している。しかし、キリスト教徒が最も多いとされる国アメリカでは同性婚が全面解禁されたこともあり、日本もそれに影響されたりするのではないかと懸念している(滝本 2015)。

一方で平良愛香の『あなたが気づかないだけで神様もゲイもいつもあなたのそばにいる』では、実際に著者の平良愛香自身がゲイの牧師をやっていて、きっかけや実体験と LGBT を肯定する主張が述べられている。キリスト教の中でも LGBT の教職者もいることが明らかだ(平良 2017)。

このように、日本のキリスト教内での LGBT の見解や主張は、否定側と肯定側に別れているように見える。そして、同時に、はっきりとした決まりはない。LGBT が今日で一般化されつつあるにも関わらず、方向性が未だはっきりとされていないことは今後将来においてキリスト教の中でも混乱を招きかねない。また、身近な街の牧師などに意見を聞き明らかにしている研究も未だない。そこで本研究においては、街の牧師や、自分の通っている教会の牧師、メンバーに意見を聞き、現在の状況と課題を解明していきたい。

1.3 研究方法

本研究においては、主にインタビューを行い、自分が通っている西東京市

にある教会の牧師先生、教会員、さらにその紹介の牧師先生に事前に決めた質問をしつつ、適宜その場に応じて質問をして深堀していく。身近な意見を研究したいため、インタビュー対象者はプロテスタントの教会の牧師、教会員、その紹介に絞る。

さらにキリスト教と LGBT について触れている本も参考に研究を進めていく。

2. LGBT についてのクリスチャンの意見

2.1 先行研究から現在わかること

先行研究から、現在では LGBT という言葉が日本で一般化されつつあるにも関わらず、実際に街のキリスト教教会の牧師、宣教師、信者の LGBT に対する考えが細かく明らかにされたものはない。現代 LGBT が普及していく中で教会側ではどのように対応をしていくのか、LGBT に対してどのような考えをもっているのだろうか。また肯定派と否定派がいるとしたら、何が原因でそのように意見が分かれたのだろうか。

2.2 調査対象人物

今回はプロテスタントのクリスチャン 6 人にインタビューをした。6 人を牧師 A (男性)、牧師 B (男性)、牧師 C (女性)、信者 D (男性)、信者 E (女性)、信者 F (女性) と表す。

2.3 調査結果

事前に 5 つの質問を用意しておき、適宜その場に応じて質問をし、深掘りしていった。

(1) LGBT についてクリスチャンとしてどのように考えますか？

・否定派意見

6 人中、牧師 A、牧師 B、牧師 C、信者 F という 4 人が、LGBT については否定だと答えた。

「LGBT についてクリスチャンとしてどのように考えますか？」という問いに関して、牧師 A は「聖書の中に神様は最初から男と女に創造されたっ

ていうのが聖書の一番最初から書かれているので、それが基本というかそれが本来の人間のあり方っていうように受け止めていて、それでまあその LGBT っていうことは神様がお造りになった本来の姿からずれてしまっている。そういう状態。健全でなく、癒しを必要としている状態という理解をしていますね。差別したりバカにしたり攻撃するわけではないけど、受容はできるけど肯定はできない。否定はしないし、その人の今の現実のあり方として受容はするけど、肯定はできない。クリスチャンの中で肯定している人もいるし、そういう意見があるのはわかっているけど、僕はそうではない」と述べていた。

また、牧師 B は「物事を見る時に基本の人身からはいるか、外側の多様性からはいるか。クリスチャンは神様との関係っていう人間関係がつけられている。命だとか人、人生だとか基本、中心、土台っていうものから考えるから、それを具体的にしたい」とやはり聖書の創世記の部分に書かれている「男と女につくられた」という箇所をクリスチャンの基本だと考えている。

姉妹 F は「SNS を開けばその問題を語っている人もいるし、クリスチャンもクリスチャン以外の人も語っているのをみて、でも自分はその人たちの意見に流されているからこの意見を持っているんじゃないかって意思は持たないようにして、自分の意見を確立したいって言う状態で今話すけど。だからそれが正しいとも思わない。今、香菜（インタビューアー）だから話すけど、それが LGBT 対象者の前だったらこんな風には言えない。YES か NO だったらそれは NO だと思う。でも、それを裁く権利は人間にはないし、神様しかジャッジする権利はない。今私が YES か NO って言ったのも裁きに入るからそれは言えないけどでもはっきりさせないといけないし、それも聖書には NO と書いてあるし」と述べていた。

また、姉妹 F にどこの箇所かを聞くと「めちゃくちゃ単純なこと言ったら、創世記に男と女につくられた二つしかないんだよ？ それ以上それ以下もないのに時代が変わっていったから人間はそう変わっていったって言うけど、じゃあそれって誰の権利？ 人間が決めたことじゃないの？ て思うし。神様が世界はそう変わっていくよって言っているのはそういうふうが悪く変わっていくよって、ざっくり言えば黙示録に書いてある」と述べた。

さらに牧師 C は「そういう人 (LGBT) がいて、自分の性は本来のものと違

うって言っていることに対して、受け止めはするし、それがいけないとか言わないけどもやっぱり元々神様が与えてくれたその女の人やったら女の人、男の人やったら男の人っていうのがあるから、多分生きてきた中でなにかがあって今こういう風な自分はやっぱり本来女だけど男とか、そういう風に生きたいって思った何かはどこかであったのかなって私は考えているかな」と述べたので、「聖書に同性愛がダメって書いてあるんですか？」と聞くと、牧師Cは「同性愛っていうことばではないけど、男色(男子の同性愛)が罪っていうことは書いてあるよね」と述べていた。

・肯定派意見

6人中、信者D、信者EがLGBTについて肯定だと答えた。

「LGBTについてクリスチャンとしてどのように考えますか？」という問いに対して、信者Dは「俺は割といいと思う。なんか割と反対派の人もね、神に背いているみたいな意見もあると思うけどまあおれは、それはある種の性格みたいな個性の一つだと思っているから、全然いいんじゃないかなと思っている」と答えた。

また、信者Eは「自分的にはそこまで干渉することではないんじゃないかなって。その人個人の問題だし。今までちゃんと考えたことがなかったからさ。うちの的には今障害の子とも関わっているから、性同一性障害とかもあるし、それはもう個人として受け止めちゃうかもしれない」と述べていた。

さらに肯定派の人にのみ「創世記の『神様は男と女につくられた』というところからLGBTについて否定している意見もありますが、それに関してはどう思いますか？」という質問をした。

信者Dは「う～ん。そこに新しい個性が生まれたみたいな感覚かな。アダムとイヴの時代から考えても多分人間は色々多様化して、まあ趣味だったりも増えていくわけでそのうちの一つとして増えたものなのかな。ステータスとして」と述べ、信者Eは「そこなんだよね。でも最初創世記ではそうだったけど、やっぱり時代が変わっていくにつれてイエス様が地上に送られたり、聖霊が送られたり時代が変わるにつれて聖書のこともだんだん変わってきているわけだから。それも(LGBTについて)時代の変化なのかなって。そういう人が多くいるわけだからそれはもう世界共通なわけだし。聖書では

そう言っているけど、うちはいいんじゃないかなって思っちゃう」と述べていた。

(2) LGBT は先天的なものかあるいは何か原因があつてのものだと思いますか？

A 牧師、B 牧師、C 牧師、F 姉妹の肯定派の人は、はっきりと「何か原因があつてのもの」だと答えた。

その理由として A 牧師は「僕がそんなにしょっちゅう LGBT の人と会っているわけではないけど、まあたまに会ったり、何回か会った中で『あ、この人って正真正銘生まれつき LGBT なんだ』とか『生まれた時からなんの周りからの影響もなく、本当に男に生まれてきたけどこの人女の人なんだとかね』そういう風に僕が関わって思えた場合、ああやっぱりそういう人も神様のご計画の中でそういう人をあえておつくりになるっていうことがあるんだなっていうのが、なんかでもし人との出会いではっきりわかった場合、まあそういうこともあるよねって思うかもしれないし、その可能性は僕の中でもあると思っている。ただ僕が関わった限り、生育の過程で過程環境でなにか人に言われたことで傷ついたり、いろんな経験をする中でまあそうやってしまったんだなと思わずにはおれない」と述べていた。

B 牧師は「本当に生まれ持ったものだと悩んでいたりする人もいると思うけど、本当に生まれ持ったもの人は少ないと思う。どちらかという周りでいろんな選択肢があるからそういうのもアリだと思っているんだらうね」と述べた。

さらに「ただし、本当に LGBT が病気ということも実際にできているかなあつて。社会全体の中でメス化する自然っていうのがあつて、遺伝子の震えが生じて来ている。男と女の区別がしづらくなってきている。同じ日本人でも、同じ男って言っても昔はもっと毛深さなど男っぽかったよ。何かを守らなきゃいけない、戦わなきゃいけないという状況が減って来ているしね。草食系男子という言葉が生まれているのもこれが要因ではないかな。」とも述べていた。

C 牧師は「きっかけがあつたんじゃないかな。生い立ちの中で。例えば多分両親との関係の中でなにか傷ついた部分があつたりとか、それを本人が気がついているか、意識しているかどうかは分からないけれども、でも何か

きっかけがあって、両親だけじゃないけどね。友達関係、学校での中とか色々そういうものがあるって、多分それがなんというか生きてくくなって違う性になりたいとか、そういう風に思っているのかなって一回理解するかな」と述べていた。

また、F 姉妹は「あると思う。だって先天的だとしたら赤ちゃんの時の記憶なんて何とでも言えるよ？ 赤ちゃんはだいたい男か女しかないのに、そこをどうこう言い始めたらそれはずるいと思う。記憶があるなら、記憶があるんですって言われたらこっちはねじ伏せられるけど」と述べていた。

否定派であった信者 D、信者 E 両者とも少しあいまいな回答に感じた。

信者 D は「元々そういう素質を持って生まれてきた人もいるだろうし、後天的な環境が原因で精神に何らかの影響を与えてしまうパターンもあるだろうし。どっちも総合して結果的に LGBT が生まれる、みたいな！ あいまいな回答で申し訳ないけど」と述べた。

また、信者 E は「うーん…両方ある気がする。どっちとも言えないね。いろんな原因があると思う。でもイメージ的には何か原因があってなのかなって思う」と述べていた。

しかし、肯定派に比べ理由がはっきりとしていなかったため、追加で「それは今までそのような人に出会って変わった人もいたから？」と質問すると、「そうだね！ A さんもはじめは迷っているように見えたし」とことだった。

(3) 今まで LGBT の人にクリスチャンの中で会ったことはありますか？ またどのように接しましたか？

(6人の体験をそれぞれその場に合った質問をしたものを記していく。多少聞き方は変わる。)

A 牧師は「今まで LGBT の人にクリスチャンの中で会ったことはありますか？」と聞くと「A さん(卒論のきっかけとなった人)とかね。本人は先天的だって言っていたね」と述べたので、「A 牧師的には違うのではないかなと思った瞬間があったんですか？」と聞くと、「そうね。それはまあ断定できないですけどね。なんか先天的だな～と言う風には思えなかったね。あとはまあゲイだって言う人にも何人会ったことはあるけど、本当に小さい時から、生まれた時からずっとそうやったとは思えない。やっぱりその人の話を

聞いたり、その人のことを昔から、小さい時から知っていたり。最初はそういうのじゃなかったよね、君途中までは女の子のこと好きやったやんって。あれ？ 急に変なこと言っているなあ。おとなになってから言っているなって」と、今までの経験からこのように思ったことを述べてくれた。

さらにリアルなその時の状況を聞くために質問を重ねた。

「A さんの場合どのように言っていたんですか？」という質問に対して「小さい時から違和感があって、まあ僕が初めて会ったのは中にのときに BBQ 来た時で、その時はまだ女の子だった。高校の途中くらいからそういう風(LGBT に) になったって言っていたね。まあだから教会の信者さんの一人が言っていたのは、元々ボーイッシュな顔立ちしている女の子だとそういう風になりやすいみたいなの。周りから言われたりして、それが A さんに当てはまるかどうかは知らないけど。そうだね。それははじめ A さんとか関わっていた女の子たちからしたらどうなんやろうね」と述べた。

また、A 牧師の LGBT の意見として、受容はできるけど肯定はできないと初めの質問で言っていたため、「受容はするけど肯定するのは難しいって話をしたんでしたっけ？」と質問すると、「そうやね。それで最後話した時にはやっぱり教会に来たいって話をして、でもなんかみんなに受け入れてもらえるかは分からないしって言って、いや来たらしいやんって言って、何回か途中来たときはあったけど。2016 年くらいに一回なんか話をしたいって言って来たんだよね。教会に戻りたいって言ってきたので、じゃあ一回話しようって言って、今みたいな話をして、今のままで受け入れるしって。でもやっぱり彼らが望むのはいきなり発表したい、いきなりかカミングアウトしたい、そういう場を作って欲しいみたいなことを言うてるから、まあそれはちょっとやっぱり難しいねって。そういうやり方よりは、教会としてそれをこう肯定はできないから個人レベルで教会きはじめて信頼関係できる中で自分はこうなんだって個人レベルで言っていくのはいいんじゃないって。『もう教会としてみなさん A さんは男性になりましたので男性として扱ってください』っていう感じでは言えないよね。それでもだいたい歩み寄って教会来た時には A くん久しぶりに来ましたって言ってあげたけどね。彼が呼んでほしいという名前で、A さんって呼ばれるの嫌って知ってるから。それでもみんなからしたらやっぱりどう接していいか分からないみたい

な微妙な雰囲気ではあったよね。やっぱりそんな居心地が良くなかったみたいやから、その後あんまり来なかったみたいやけど」というように、どのような考えを持って接したか述べてくれた。

次に「今まで LGBT の人にクリスチャンの中で会ったことはありますか？ またどのように接しましたか？」という問いに対して、B 牧師は「おったよ。全ての人に対して愛を持って接することは変わらない。ミクロ（個別）の視点とマクロ（全体的な）の視点がある。マクロの視点から言えば僕は絶対男と女だ。神様は男と女に作られたから。ただし今のいろんなホルモンのバランスが狂いかけてる、自然界の法則が狂いかけてる社会の法則が狂いかけてる中でいろんなケースをもってミクロの視点ではいろんな人が出てくるから、そういう人に対して愛を制限するのか差別するということはある。否定するわけではない。ただし基本から考えたら、それがいいんだよということ（LGBT であること）は言えない」と述べた。

C 牧師に「今まで教会の中で LGBT のような人に会ったことありますか？」と聞くと「あります。」と答えたので「どのように接しましたか？」と聞くと、C 牧師は「どうやったかなあ。教会だけじゃなくて小学校くらいの時でも女の子やねんけどすごいボーイッシュな子がいて、友達として仲よかったけど、そういう子はいた。教会関係なく。その時は LGBT とか知らなかったけど、その子が結構私のこと好きとかだからリアルに感じたよね。そういうことあると」と、教会内ではないが LGBT の人に会ったことがあると述べた。

信者 D に「今まで LGBT の信者に会ったことはありますか？」と聞くと、「会ったことありますね。自分の教会や他でも」と述べたので、「その時どのように接しましたか？」と聞くと、「まあでも俺は変に気を使うのが逆に向こうはいやなのではないかなと思って普通に接しましたね」と述べた。

また「距離感とかも変わらず？」と聞くと、「距離感もまあ変わらなかったね。『あ、そうなんだ』みたいな感じ。色々生い立ちとかも話してくれたんだけど。昔から女の人興味なくてみたいなこと言って」と述べていた。

信者 E は「教会で LGBT の人に会ったことはありますか？ どのように接しましたか？」と聞くと「あります。そのときは特に何も考えてなかったかも。そういう子もいるんだって。あの時の A さんって結構曖昧だったじゃ

ん？ 女の子(元の性)でいようとしていたけど見た目は男子だったし。小学校でもそういう子がいたのね。でも、今全然女子やっているんだけど。あ、でも一人はやってないか。あんまり深く考えたことがなかったから個人として接していた。『LGBT ね、OK』みたいな』と、C 牧師同様教会だけではなく小学校時代にも会ったことがあることを述べてくれた。

信者 F に「あなたは LGBT の人に会ったことはありますか？」と聞くと、「だから例えば A さん(この論文をかく背景にいた LGBT 当事者)の存在は大きいよね。だからこのことがなければここまで考えたことないし、実際に事件がうちの家で起きたし。それが結構ずっと残っているね。クリスチャンなんだって。私はもうちょっと迷って戻ってきてくれるって信じてたから。けどクリスチャンとして LGBT なんだって胸は張り始めた時はそこまでなんだって」と述べた。筆者が「あなたはもう、その事件が起こった時からクリスチャンの LGBT はなしだと思っていた？」と聞くと、信者 F は「でもやっぱりいろんな人がいる。いろんな人と出会ってマレーシアもフィリピンも。マレーシアでも一人二人いたかな？ あ、でもそんなに関わっていないけど、見た目だとしても結構ちゃんとしていたクリスチャンでそうなるってことは、結構ちゃんとした考え方があるんだろうなって思う。ただ気軽に教えてもらえるようなクリスチャンの LGBT がまだいないから、ちゃんと聞いてないけど、LGBT でも神様の言葉を大胆に語れる人ってたくさんいるし、福音を伝えることが神様の私たちへの命令だから、それを果たす人たちって素晴らしいと思う。それで言ったら LGBT は関係ないと言えちゃうけれども、自分自身が審判を下される時、天国か地獄にしか行けないんだよ？ って私たちは学んでいるでしょ？ それまでの心の準備をしたほうがいい」と述べた。

また、「実際に A さんのことがあった際どう接しましたか？」と聞くと、F 信者は「向こうから『今後教会に行きたいと思っているけど、あんなこともあったし(笑)』と相談きたんだ。でも、その話をきっかけに『LGBT に反対している考え方を持っている人は教会にも沢山いるよ』って私の口からも言った。だから『傷つくと思うよ』って。『でもそれでもいいんだったら神様の言葉を聞きに私は来るためにもその方がいいと思うし。そのためにうちの教会を選んでくれるんだったら、私は素晴らしいと思うし、いいことだと思

うけど、一番最初に聞いたほうがいいのは牧師先生かもね』って言って牧師先生にパスした」と述べていた。

(4) 今後教会メンバーが増えていく中で LGBT の人もでてくると思いますがどのように接していきたいですか？

肯定派と否定派の違いをわかりやすくするため、ここでは両者を分けて書いていく。

・否定派(牧師 A、牧師 B、牧師 C、信者 F)

この「今後教会メンバーが増えていく中で LGBT の人も出てくると思いますが、どのように接していきますか？」という質問に対して、牧師 A は「その可能性も十分にありますよね。そういう人が一人いたらまた似ている人が寄って来たりして。その場合どうするかやね。まあ、やっぱり話して聞いて、関わっていくしかないよね。そんな答えはないんやけど。多分ずっとそこまでする人は居心地が良くてとかだと思うんですけど、なかなか難しいですよ。まあ、だけど教会の方向性とかちゃんとその人が受け止めてくれて、理解してくれるなら全然いてもらうことはできると思いますよ」と述べていた。

また、「はっきりこうしていくっていうのはまだ無いんですね？」と聞くと「無いと思います。うん。無いと思います。教会の中でそういうセミナー、勉強会っていうのはこの 1、2 年だいぶ増えてきましたね。LGBT の人とどうやって関わっていくかみたいな」と述べていた。

牧師 B は、この質問に対して「やっぱり全ての人に対して愛を持って接することは変わらないね。やっぱり生まれ持った性、生まれ持った時に与えられた性、どっちにしようかではない。神様から与えられた性である。その生まれ持った性っていうのをなぜそれから逃げたかったり否定したかったり。だからカウンセリングしたりして、いろんなケースがあるから全てを LGBT にしたりできないんだけど、基本は生まれ持った性に戻って欲しい。いままでいろんな教会にいて自分はやっぱりそういうことだったんだ(理由があって LGBT になっていた)、いや違うどこかで何か傷ついたり歪んだりした部分があって、それで自分がそういう方向に行っちゃったんだと気づいて戻ってくる人は戻ってくるから」と述べていた。そこで、「それは神様に

触れられて？ 出会ってですか？」と聞くと、牧師 B は「そう。触れられて。そうすると服装が変わってきたり女性になっていた人がお化粧をやめたり今度男っぽい髪型に変えたり服装が変わったりすると。どうしても女性側になるうとしている人っていうのは大概途中でホルモン剤を飲み始めてるから、だから女性ホルモンがでて女性っぽい体になっているけどやめたら、なんか体がっしりしたりとか、消えてたはずのヒゲが生え始めたりあるんで、本当の意味で癒されてる。だから病気、病で歪みでそうになっている人とかは実は相当多いと思う。本当の病気で最初からそういう治療が必要な人っていうのも言ったけどその境目は本当に難しい」と述べていた。

牧師 C は次のように語った。「教会にはすごくウェルカムで、きて欲しいと思ったし、多分私が言っているのはその傷とか何か辛い過去があったりとか、しんどかったいろんなことがあるとか、教会に来ることで、そういうところから癒されていったり、気づいたりそこが変えられていって、また生き方が変えられてくんじゃないかなって思うので、ぜひきて欲しいし、そういうのまた話していけばいいのかなって思って、是非来て欲しいって思っているんだけど、でも多分聖書では結構やっぱりそういう部分ってもう根本的なことってあるから、男と女に作った、やっぱりこうそういう人たちが教会に来るときに、多分なんか自分が悪いことしているとか罪を犯しているとかそういう風にみんな習っているから多分責められているように感じるよね。きっと。だから居心地が悪く感じてしまうだろうなって。すごく思うので、だけど私はそれもその人の弱さというか、傷か。それは一人一人違うもので、弱さがあったり、自分を持っているやんな。こういう人たちは性という問題の中で弱さを持っているだけで、それがすごく特別でダメなことだとは思わない。だから私はぜひきて欲しいと思うし、またお話を聞いて一緒に祈ったり考えたりできたらいいなって。元の性に戻ることはその人は望んでないと思うけど、だけど、私は、私はやで？ 何か原因があるだろうなって考えているから、また神様に触れられて、心の傷が癒されていく中でそういう風になっていく可能性があるんじゃないかって考えている。」

私は牧師 C が昔からそういう考え方であったのか気になったので、「昔からそのように思っていたんですか？」と尋ねると、「思っていたね。ただ世の中の的にはきっとそうじゃないよね (LGBT は先天的だと考えられがち)」と

ことだった。

次に信者 F は『祈っているよ』攻撃。祈っているよって伝える時と、伝えなくていい時を考えたほうがいい。本当に一つ一つの言葉に気をつけたほうがいい。LGBTの方は本当にセンシティブ、繊細だから」と述べていた。

・肯定派(信者 D、信者 E)

信者 D は「もし今の教会で LGBT の人が現れたらどのように接して行きたいですか?」という質問に対して「その子が接して欲しいように接するかな。男子と女子で接し方がそんな変わらないのね。うちのキャラで接している感じ。みんなと変わらないように同じような距離感で、みんなとも馴染みやすいように接していくかな」と楽観的に述べた。

また、信者 E はこの質問に対して「前その話を牧師先生としたことがあって、牧師先生はどちらかというとはよくないっていう立場。おれとちょっと違うからね。まあそこは牧師先生のいうことを聞いていくのか、俺がそれを無視して自分の意思でいくのか、それは難しいところだけど。まあ、もしそれが教会の方向性なのだとしたら俺は治す方向にいくかな。教会としてそれがいいと牧師先生が判断したんだったら」と、肯定派ではあるものの、自分の教会の牧師先生の方向性にあわせると述べた。

(5) 肯定しているクリスチャンとの今後の関係は?

この質問は、他の教会のクリスチャンとの関わりが多い牧師の人のみに聞いてみた。

牧師 A には「肯定しているクリスチャンとかに対しては、別に敵対視するわけではないんですか?」という聞き方をしたところ、「いやどうでしょうね。その同性愛の人たちを積極的に肯定しようっていう人たちの中にも、攻撃的な人と、そうでない人がいて、あるいは『同性愛は僕みたいに肯定できないよ』って人の中にも、攻撃的な人とそうでない人がいて、僕は別に喧嘩するわけじゃないけど、両方のサイドに喧嘩が好きな人もいるから、そういう人たちはお互いにあっちは間違っている、こっちは間違っているって言うよね。だから一概には、それは言えないよね。自分の立場は立場として大事にするけど、人を否定しないっていうのがいいと思うので。でも、まあ聞いて

たことあるか分からないけど、原理主義ファンタメンタリズムっていうのは、自分達だけが真理を持っているって主張すると戦争になるのでそうはなりたくない。キリスト教の原理主義、イスラム教の原理主義、仏教の原理主義で自分たちが真理を持っている、正しいってなると戦争になるから。僕は原理主義にはなりたくない。そういう意味では、保守的ではあるけど、原理主義にはなりたくないね。僕の言っている意見も 100% 正しいと思っているわけではないから、変わる可能性はある。僕がそんなにしょっちゅう LGBT の人と会っているわけではないけどまあたまに会ったり、何回か会った中で『あ、この人って真正正銘生まれつき LGBT なんだ』とか『生まれた時からなんの周りからの影響もなく、本当に男に生まれてきたけど、この人女の人なんだとかね』そういう風に僕が関わって思えた場合、ああやっぱりそういう人も神様のご計画の中でそういう人をあえておつくりになるっていうことがあるんだっていうのが、なんかでもし人との出会いではっきりわかった場合、まあ、そういうこともあるよねって思うかもしれないし、その可能性は僕の中でもあると思っている。ただ、僕が関わった限り、生育の過程で家庭環境でなにか人に言われたことで傷ついたり、いろんな経験をする中でまあそうってしまったんだと思わずにはおれない」と述べた。

牧師 B は次のように述べた。「LGBT 肯定の方だからといって、基本的には関係性はわかりません。それは、教会に来て、まだ自分の罪を認められない人と一緒ですから。クリスチャンにならないからといって、拒否することはないと思いますので。優しく、楽しく接しながら、同時に、ちゃんと聖書の基準に立ち返った方がやはりシンプルに幸せになれるよ！ と意見を持ち続け、何かのきっかけがある時には、しっかりとお話しすると思います。」

そして、牧師 C は次のように述べた。「だから、あんまりこの私の考えを言いすぎると多分対立するやんね。真っ向から考え方が違うから。だからあんまりこういう風には言わないで、私の心の中では思っている。そういう人たちはそういう考えを持っているよね。その中で信仰も持っているよね。だから、まあ、それはそれで認めてこのまま中々そんな簡単なことではないと思う。本当に。時間もかかるだろうし、もしかしたらこのままになることだってあるよね。だって自分って変わるのだからってそんな簡単なことじゃないやろ？ そういうことだから、その人をそのまま受け入れながらやっていく

やろうね。」

3. 現代における日本のキリスト教信者へのインタビューから

3.1 LGBT 否定派意見分析

否定派意見を分析すると、(1)「LGBT についてキリストチャンとしてどのように考えますか?」と、(3)「今まで LGBT の人にキリストチャンの中で会ったことはありますか? またどのように接しましたか?」という質問から、牧師、信者共に聖書の創世記に基づいて、神様は男と女に造られたことが基礎であり、基本であると考えている傾向が見られた。しかし、キリストチャンが LGBT であることを肯定はしていないが、教会に来ること自体には全く否定していないという意見が多かった。

また、(2)の「LGBT は先天的なものかあるいは何か原因があつてのものだと思いますか?」という質問から、LGBT の人は先天的に LGBT であったのではなく、人生の中で何か原因があつてそうなつたのだと思うという結果であった。

(4)「今後教会メンバーが増えていく中で LGBT の人もでてくるとは思いますか、どのように接していきたいですか?」と言う質問の答えから、元の性に戻ることを望んで寄り添っていくという様な意見が共通の結果として見られた。しかし、牧師 A、牧師 B は途中「難しい」と悩んでいる様子も見られた。

さらに、全体的に見ると、牧師 A、牧師 C、信者 F はあくまで個人の意見であるという様に共通して述べていた。

3.2 LGBT 肯定派意見分析

肯定派意見を分析すると、まず「LGBT についてキリストチャンとしてどのように考えますか?」という質問から広げて質問をしたところ、時代が変化したり、多様化しているから肯定する、という傾向が見られた。(3)の「今まで LGBT の人にキリストチャンの中で会ったことはありますか? またどのように接しましたか?」という問いへの答えでも、両者とも普通に変わらず接したということが結果から分かった。そして、(4)「今後教会メンバー

が増えていく中で LGBT の人もでてくると思いますがどのように接していきたいですか？」という質問に対しても、共通して普通にならずに接したいという結果であった。

さらに信者 D、信者 E の両者とも牧師 A、牧師 B、牧師 C、信者 F に比べ楽観的に話していた様子であった。しかし信者 E に関しては教会の方針などを絡めた質問をすると「難しいね」と迷ったことも明らかだ。

3.3 肯定派否定派の共通部分

6人に共通して見られたのは、LGBT のクリスチャンに出会ったことがあるということであった。

4. クリスチャンから見た LGBT とは

4.1 聖書から考える LGBT

なぜ LGBT 否定派の人たちは、そんなにも聖書の言葉を重要としているのか。牧師 A、牧師 B、牧師 C、信者 F は口を揃えて「聖書にはっきりとだめだと書いてある」と述べていたので、牧師 C が後でメールで送ってくださった物と一緒に挙げる。

「創世記 1:1 初めに、神は天地を創造された。」

「創世記 1:27 神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。」

「創世記 1:31 神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。」

「創世記 2:24 こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。」

「第一コリント 6:9 正しくない者が神の国を受け継げないことを、知らないのですか。思い違いをしてはいけません。みだらな者、偶像を礼拝する者、姦通する者、男娼、男色をする者、6:10 泥棒、強欲な者、酒におぼれる者、人を悪く言う者、人の物を奪う者は、決して神の国を受け継ぐことができません。」

「同じように、男も、女の自然な用を捨てて男どうしで情欲に燃え、男が男と恥すべきことを行なうようになり、こうしてその誤りに対する当然の報いを自分の身に受けているのです。ローマ人への手紙 1:27」(滝本 2015)

以上、「男と女につくられた」という1つの部分だけではなく、このような箇所が、彼らが肯定できない理由になっていると考えられる。

それに比べて信者 D、信者 E の、時代が変化したり、多様化しているから肯定している、という傾向は聖書における根拠がない。インタビューの中でも聖書についてはほとんど語っていなかったことから、上にも記したように、キリスト教が最も多いとされる国アメリカでは同性婚が全面解禁されたこと(滝本 2015)や、渋谷区で「同性愛パートナーシップ条例」が認められていること、さらに平良愛香の「あなたが気づかないだけで神様もゲイもいつもあなたのそばにいる」というような、LGBT を肯定する者が周りに増えていることが要因の一つではないかと考える。

しかし、これに対して信者 F は「それ以上それ以下もないのに(神様は男と女につくられたこと)」と答えており、信者 F の「聖書の教えは今現代でも変わらないものである」という発言は、他の牧師の「基本」、「中心」という言葉から、聖書の教えは揺るがないものと強く思われていると考えた。

4.2 LGBT は先天的なのか

分析結果から、牧師の中では特に断定して先天的ではないとは言えない様子であった。牧師 A も今までに自分が会ったことがないから先天的ではないと言えるが、もし先天的と思えるような人に出会えば考えが変わるかもしれないと語っていたように、他の牧師もそのような先天的に LGBT だと思える人に会ったことがないため、そのように少々自信がないように語っていることが考えられた。ただ、牧師 A、牧師 B、牧師 C は、元々の性から LGBT と言われる人になった原因と思われるものがあったり、牧師 A、牧師 B は LGBT の人が元の性に戻った人に出会っていることが現在先天的とは言えない理由になっていると考える。

また、信者 D、信者 E にいたっては、両方あると述べていたが、マサキ

チトセの「社会は頑張って異性愛者を育てている 同性愛は先天的か後天的かの議論を超えて」によると、偏見を持たずに解明しようとしているものの、科学的に分かっていることは「先天的な要因と後天的な要因のどちらもあると予想される」ということくらいだと記してあることから（マサキ 2017）、キリスト教の中でもその部分ははっきりされていないように思われた。

4.3 研究対象者全員の共通部分

今回6人に話を聞いて、皆キリスト教という中で LGBT のクリスチャンに出会ったことがあることが分かった。その中での意見で、部分的には、否定派の人が肯定的な意見を述べる際（その逆もある）「難しいね」、「多分」や「私の意見はね」など少し濁すような言い方が見受けられた。これは、今まで LGBT のクリスチャンに出会った事があるが故に、その人への配慮とも見受けられる。否定派も、肯定派も、全ての意見が曖昧なのではなく、断言しているところと曖昧に語る様子があったことからこのように考える。その逆も同様であった。肯定派の人のみに「創世記の『神様は男と女につくられた』』というところから LGBT について否定している意見もありますが、それに関してはどう思いますか？」という質問への答えは、キリスト教信者として否定派につながる質問であったのだが、やはり一瞬考える様子が見られた。これも答えによっては今まで出会った LGBT 者を否定することにもなることが根拠としてあったのではないか。

4.4 肯定派が楽観的に話すことについて

信者 D、信者 E が楽観的に話している様子は、信者 F がはじめに私に語る前に「SNS を開けば、その問題を語っている人もいるし、クリスチャンもクリスチャン以外の人も語っているのを見て」と述べていたことから、SNS からもやはり影響を受けやすいことがわかる。そして、LGBT を肯定し、守る事が一般化されつつある現在では、肯定派の者の方が気軽に話せるのではないだろうか。昔は、牧師 B が言っていたように、同性愛が病として扱える時代もあったが、信者 D、信者 E が言っていた時代の変化から、LGBT を認めてあげようという風潮が出始めている。『JobRainbow』という LGBT の転職・就活サイトまであるくらいだ。これらが恐らく否定派に比べて肯定

派が楽観的に話せることに繋がっていると考える。

4.5 今後の対応について

牧師の意見を見てみると、「話をして聞いて関わっていくしかないよね」や「全ての人に愛をもって接することはかわらない」など、LGBTの人に対して迫害するのではなく、むしろ積極的に関わっていきたいというように感じられた。しかし、やはり私の身近な教会でも未だLGBTに対してはっきりとどのようにしていくかというものは無く、牧師Aによると、ここ1、2年勉強会やセミナーもクリスチャンの中で開かれているようだ。

だからと言って、皆意見が100%同じになるのかという訳ではない。牧師A、信者Fはもちろん積極的に関わっていくが、LGBTの人が教会の方向性を理解できるかによる、つまりLGBTの人だけに合わせてあげられるわけではないというようなことを言っていたり、牧師Cは何か辛い過去から癒されてまた生き方が変えられていくと思うから、ぜひ来て欲しいと言っていたり、また、信者Dのように、何も変わらず接したいなど、接し方の考え方に関しては違いも出てくる事が分かった。否定していた牧師や信者が、絶対に否定だとは言えないのも、新約聖書にでてくるお話で、マグダラのマリアが元は娼婦であったが自分の長い髪で高価な香油を使いイエスの足をぬぐい悔い改めを告白したことで、イエスはそのマグダラのマリアの罪を許されたというところから、イエスが聖書で罪とされていることも悔い改めによって許してくださる寛容かつ善人であるというところから来ているのではないか。LGBTの人たちを聖書の教えに背いているからと言って完全に否定することも、果たしてイエスが望むことなのか、という考えがあるのではないかと考察する。

また、今後の対応としてキャンプが行われた際のお風呂やトイレの問題はLGBTの人が教会に来る前に考えていかなければならないのではないかと考察する。

5. 日本のキリスト教信者へのインタビューから見えてきたこと

5.1 本論文の要約

本研究は、LGBTが普及している現代で自分がキリスト教信者という立場

から牧師や他の信者がどのような意見を持っているのかという課題を明らかにするためのものである。LGBT に対して否定派、肯定派が分かれていることは明らかになっているが、果たしてそれには原因があるのだろうか。その理由を調べるために、実際に身近な牧師、信者にインタビューを行った。本論文はそこで得られた意見を忠実に記述したものだ。キリスト教として LGBT をどのように考えているか、今までの経験、今後どのように接していくかという質問を中心に深掘りをして分析して、その結果をもとに今後の課題や現状を明らかにした。

5.2 本研究で明らかにされたこと

日本のキリスト教内での LGBT の見解や主張は否定側と肯定側に別れているように見える。そして、同時に、そこにははっきりとした決まりがない。こうした中で、私は今後将来においてキリスト教の中でも混乱を招きかねないことを懸念した。本研究の目的は、街の牧師や自分の通っている教会の牧師、メンバーに意見を聞き、現在の状況と課題を解明することであった。研究を進めた結果、否定派、肯定派があったものの、否定派でさえも、LGBT 者を根本から否定しているのではなく、キリスト教の中で聖書を学び、その教えに基づいて否定していて、教会に来ることに關してはとても肯定的であったことが明らかになった。しかし、それでもやはりキリスト教の中でも意見が定まっておらず、揺れ動いていることも明らかになった。また、否定派では、LGBT は何か原因があつたもので、神様の癒しによって元の性に戻ると考えられていた。

5.3 今後の課題と展望

LGBT についての考え方は曖昧である。しかし、今後の課題として、果たして否定か肯定かをはっきりとすべきなのか、という問題がある。曖昧にしていることも、もしかしたら LGBT の人を守ることになるのかもしれない。その本質を知るために、今回は 3 人の牧師と 3 人の信者に話を聞かせてもらったが、より多くの牧師や信者とこのことについて考え、また質問を深めていきたい。

さらに LGBT のキリスト教の方にも、実際の体験を聞いていくことで

課題について探究していきたい。

5.4 本研究を終えて

私はもともと LGBT にとっても肯定的なイメージを持っていたが、クリスチャンという立場から再び考え、牧師や信者の意見を聞いてみると、現在、正直どちらとも言えない。しかし、だからと言って「絶対だめだ」という訳でもない。私自身も肯定派と同じく、変わらず、いつものように接していきたいと考えるが、その人が悩んでいるとするなら元の性に戻ることを提案するかもしれない。

また、いくらセミナーや勉強会があって知識が学べても、それぞれのやり方で接していくことが大切であって、LGBT と一つに言ってもみんなに認められたい人、公にして欲しくない人と、人によっても対応を考えて丁寧に接していかなければいけないと感じた。以前の A さんの時は、どのようにしてあげたら良かったのかと今回再び考えさせられ、もっとその子と関わる時間を作り、距離が近かった私が話を聞いてあげたかったと思った。LGBT の人にまた同じ思いをさせないためのきっかけとして、この論文が役に立てばと思う。

参考文献

- アウティエロ、アントニオ 2019 『時代の変化における同性愛とキリスト教倫理』塩見智弘訳『広島大学応用倫理学プロジェクト研究センター研究成果報告書』pp.153-156、広島大学応用倫理学プロジェクト研究センター。
- 伊藤裕子・加藤 悠二・堀江有里・東優子・湯川隆子・松並知子 2018 『今、教育現場で LGBT の子どもたちは』『教育心理学年報』57 巻、pp.291-301、一般社団法人日本教育心理学会。
- 榎本てる子・岡嶋宙士・工藤万里江 2017 『キリスト教主義大学における LGBT 学生に対する人権保障の取り組みに関する調査』『関西学院大学人権研究』21 号、pp.1-13、関西学院大学人権教育研究室。

- 櫻井圀郎 2019 『聖書における性別の神学的意味と実践的意義』『キリストと世界：東京基督教大学紀要』29号、pp.137-156、東京基督教大学教授会。
- 平良愛香 2017 『あなたが気づかないだけで神様もゲイもいつもあなたのそばにいる』学研プラス。
- 滝本順 2015 「同性愛と神の裁き」『船の右側』9月号、p.16、地引網出版。
- 趙慶喜 2018 「韓国における女性嫌悪と情動の政治」『社会情報学』6巻3号、pp. 35-47、一般社団法人社会情報学会。
- 堀江有里 2009 『キリスト教における当事者運動の可能性——同性愛(者)嫌悪への対抗言説の構築に向けて——』『宗教と社会』15巻、pp.107-117、「宗教と社会」学会。
- 同上 2011 『レズビアン視点からキリスト教を読む——異性愛主義との〈闘争〉と〈連帯〉の可能性——』『立教大学ジェンダーフォーラム年報』13巻、pp. 41-50、立教大学ジェンダーフォーラム。
- 前島常郎 2008 『性同一性障害 Q アンド A—クリスチャンとして考える』ファミリー・フォーラム・ジャパン。
- 森本あんり 1997 「同性愛とキリスト教—現代性理論の未解決の課題—」『福音と世界』1997年4月号、pp.8-13、新教出版社。

参考ウェブサイト

- マサキチセ「社会は頑張って異性愛者を育てている 同性愛は先天的か後天的かの議論を超えて」(2017年)https://www.excite.co.jp/news/article/Wezzy_50598/?p=2 2019/10/25アクセス。
- 三橋順子「『LGBT』という言葉の起源について(2015年)」<https://junko-mitsuhashi.blog.so-net.ne.jp/2015-04-04-1> 2019/8/20アクセス。